

問6 1コリント1:18~24を読んでください。パウロは十字架について、何を語り、「世の知恵」とどのように対比していますか。なぜ今日も、「唯物論」（実在のすべては物質であり、神も超自然の世界も存在しないとする考え方）が「世の知恵」を支配するとき、十字架のメッセージが非常に重要なのでしょうか。

キリストの十字架は救済の歴史のまさに中心です。「永遠もカルバリーの十字架において現された愛の深さを測ることはできない。そこにキリストの無限の愛とサタンの果てしない利己心が相対していた」（ステファン・N・ハスケル『十字架とその影』5ページ、英文）。

キリストがへりくだってご自身を人類の身代わりとして捧げられた一方、サタンは利己心のためにキリストを受難と苦悩に巻き込みました。キリストは、すべての人類が直面しなければならない自然の死を経験されたのではありません。彼は第二の死を経験されました。キリストを受け入れるすべての人が、第二の死を決して経験するがないように死んでくださったのです。

十字架の意味について考えるとき、私たちが覚えておかねばならないいくつかの重要な点があります。第一に、十字架は罪に対する神の正義の最高の啓示でした（ロマ3:21~26）。第二に、十字架は罪人のための神の愛の最高の啓示でした（同5:8）。第三に、十字架は罪の鎖を断ち切る偉大な力の源です（同6:22、23、1コリ1:17~24）。第四に、十字架は私たちの永遠の命の唯一の希望です（フィリ3:9~11、ヨハ3:14~16、1ヨハ5:11、12）。そして第五に、十字架は宇宙における将来の反逆に対する唯一の対抗手段です（黙7:13~17、同22:3）。

十字架についての決定的なこれらの真理のいずれも、「世の知恵」によっては見いだせないものです。それどころか、十字架の言葉は世の知恵には「愚かなもの」（1コリ1:18）であり、世の知恵はしばしば、創造主が存在するという、最も明らかな真理さえ認めないことが多いのです（ロマ1:18~20参照）。

ギリシア語の「愚かなもの」は英語の「ばか」に関連しており、十字架について説くことは、「世の知恵」によれば「ばかなこと」です。世の知恵は、イエスや、イエスが十字架の身代わりの死によって私たちに与えられる救いも知ることができません。

「世の知恵」が与える価値が何であれ、なぜ私たちは、イエスを信じることや、「宣教という愚かな手段」（1コリ1:21）を通して与えられる希望を決して妨げさせてはならないのでしょうか。